

## 故 生瀬克己君を追悼する

— Vladimir Godar 作曲 “Mater” Recorded 2005 ,  
St.Georgy Church , Slovakia を聴きながら —

元 桃山学院大学教授  
国文学研究資料館名誉教授 安 澤 秀 一  
駿河台大学名誉教授

2008年2月1日に生瀬 克己君が逝去した、と庄谷 邦幸さんから電話でお聞かせ頂いた。一瞬、私は言葉を失った。昨年末であったか、生瀬君と電話で長話をしたのに、という想いがよぎった。たしかにその折、体調が優れないので、大学に退職を申し出た、という話が出ていたことを思い出したが、まさかこれほどの事が起ころうとは俄かに信じられなかった。享年66歳、晩年は車椅子を使うようになっていたが、研究意欲は旺盛のままであった。私にとって長年の研究仲間を失った悲しみは深く、筆舌に尽くし難い。

生瀬君との出会いは1964年春、私のゼミ募集の折であった。当時、私はゼミの教材として徳島藩「立毛成熟并村浦之様子申上書」マイクロフィルム焼付版の輪読を行っていた。生瀬君は近世史料を読めるようになりたい、ということで応募したのである。この史料を利用して拙稿「寛政期における徳島藩の農業と水産業上・下」『桃山学院大学経済学論集』7 - 1・2、8 - 1、1965・66を発表した。またこれより先に発表した「明治3年における人口構造 南武農村（40カ村）の場合」『桃山学院大学経済学論集』4 - 3、1963は明治元年公布京都府戸籍仕法に則って作成された丙午戸籍の人口分析であり、生瀬君の関心を引いたようである。彼の卒業論文のテーマは大阪所在被差別部落の近世における人口動態であった。これは後に改稿し「近世後期における被差別部落の人口変動について 和泉国泉郡南王子村の場合」『経済学雑誌』63 - 6、1970大阪市立大学経済学会として掲載された。

幼時にかかった病気の後遺症のため、歩行に不自由であった生瀬君との付き合いから、私は多くのことを学ぶことが出来た。当時の生瀬君は学内移動の際、よく転んだものである。それを助けようとした私に「自力で立ちます」と宣言した。身体障害を抱える人への安易な同情ではなく、心からのサポートが必要と教えられた。以来、彼が立上るまでジッと見守ることにしたものである。また同じゼミの、桃高で2年下級であった植嶋 征平君（卒論「枚岡の水車と伸線工業 その歴史と現況」『桃山学院大学経済学論集別巻学生論集』1号収録）に誘われ、生瀬君と3人で東大阪市額田の旧家額田周吉さん宅に家蔵の近世史料を拝見するために伺ったことがある。20分以上もかかる坂道であったが只管、不安定な姿勢で歩き続けた姿が今も眼前にある、と生瀬君の逝去を告げる私の電話に、植嶋君は生瀬君の自立心の強さを語ってくれた。なお長谷川 修一郎教授は桃山学院高校で同級であったことから、生瀬君のこうした自立心を、高校・大学と変わることなく、支えた一人であった。

そして東京育ちであった私が被差別部落について、それまでと異なる眼を持てるようになった。当時ゼミの一年上にいた宮本 進君（京都伏見高校教諭・桃山学院大学非常勤講師）が被差別部落研究会を立ち上げようとした時、私に顧問になるように生瀬君は強く進言してくれた。後年、私が「宇和島藩切支丹類族改・宗門人別改・公儀え差上人数改の基礎的研究」『史料館研究紀要』12号1980（含む被差別人口）を発表した時、二人から評価して貰ったことも忘れ難い思い出である。私が解説と編集に係わった『群馬県被差別部落史料 小頭三郎右衛門家文書』岩田書店2007を、お目に掛けられなかったことが悔やまれます。

大学院への進学を希望した生瀬君は、被差別部落研究において指導的な役割を果たされ、屈指の業績を挙げておられた大阪市立大学経済学研究科原田伴彦教授に師事すること願い、一年後に望みを実現した。そして原田教授と山崎 隆三教授のお二人からご懇篤なご指導をうけたことが、生瀬君の学問形成に大きく開花するきっかけを与えたのである。また大学院同窓の大島

真理夫教授（大阪市立大学）や芝村 篤樹教授（桃山学院大学）・寺木 伸明教授（桃山学院大学）など、研鑽を積むための真摯な研究環境に身をおくことが出来た。研究者として大成するための薫陶を十二分に享受し、また続々と研究成果を発表出来るようになったのは、大阪市立大学の先生方と同期の方々のお陰であり、また生瀬君を通じて直接的に、あるいは間接的にこれらの方々から学べたことを、私は感謝しております。

はじめ被差別部落研究に専念していたが、同時に九州大学文化史研究所所蔵史料の閲覧から、筑後川舟運と年貢米の關係に眼を向けるなど、視野を広げる努力をしたようである。私も大学紛争が一段落した頃、鳥取藩財政史研究のための資料収集に生瀬君を誘ったことがある。結局、生瀬君のオリンパス・カメラのフィルム巻上装置が作動しなくなる、という酷使の苦い思い出のみが残った。この資料収集は鳥取藩家臣団の宗門人別改帳の存在を確認しただけで、残念ながら鳥取藩財政史研究の成果を出せないままに終わった。

やがて1974年、生瀬君は桃山学院大学社会学部に助教授として任用された。そして母校である桃山学院大学の教員も職員も温かく迎えてくれたのである。2年後に書いた「近世後期における羣心の畸愁と所在」『桃山学院大学社会学論集』9 - 2 1976は生瀬君の新しい境地を示すものであった。このあと次第に身体障害を対象とする論文・著書が比重を増した。自分自身の身体障害を客観的に見つめることが研究者として生きることの証となったのではないであろうか。紙数に限りがあるので、数々の研究業績については年譜を見られたい。なお共同研究（滝澤 武人教授など）に直接参加出来なかったものの、桃山学院大学総合研究所報に連載された「地方細論集」翻刻・解題、11 - 3、12 - 1、1986は私にとって共同作業の仲間であった、という思いがある。ともあれ教育・研究だけに専念するというわけにいかないのが昨今の大学教育に携わるものの宿命である。生瀬君にとって母校の教員として管理業務に関係せざるを得なかった。各種委員会を始め、1998 - 99年には一般教育部長という要職を果たした。そうした激務を遂行できたのも、前学長沖浦和光教授・現学長松浦 道夫教授、また鈴木 幾太郎教授、林 陸雄教授な

どの桃山学院大学教員・職員全ての身体障害についての理解と心からのサポートがあったからこそだと思っています。

私もまた17年間の桃山学院大学勤務から転身することとなりました。生瀬君と同じ職場で働くことは終わりました。1978年4月、私は史料保存を業務とする史料館（国文学研究資料館アーカイブズ研究系）に移り、アーカイブズ学を開拓することとなりました。私も自分の歩むべき道を漸く見出したのであります。転身直後、後藤 邦夫教授のご推挽によって物理学会のシンポジウムでアーカイブズについて講演させて頂けたこととか、庄谷 邦幸教授が桃山学院大学退職後、大阪市立公文書館長に就任されたこととか、思わざる激励を受けることが出来ました。そうしたことも含めて、職場は異なるものの、何かの折があれば、生瀬君と直接の面談や電話を使って、互いの近況を語り合うことを続けて来ました。

桃山学院大学で働いた17年間よい仲間恵まれました。その上、生瀬君という一途の研究仲間を得ることが出来ました。今は生瀬君を失った悲しみに耐えなくてはなりません。心からご冥福を祈り、ゆっくりお休み下さい、と申し上げる次第です。

なお末筆になりましたが、長い間、生瀬君を見守ってきた養親のご養生を祈って止まないことを申し添えたい、と思います。 （2008 - 05 - 26）